「青葉の底」小考

――室町後期廷臣の「残花」詠と白楽天詩――

相原宏美

はじめに

稿者は、かねてより山科言継を中心とする室町後期廷臣の和歌に関心を持ち、考察を行っている。その言継の家集『拾翠愚草抄』九三四番[1]に、次の一首がある。

花纔残

春ふかく青葉か底にふく風も日影もしらぬ花の露けさ

歌題右肩の注記によれば、九三五「三月盡夕」・九三六「寄山恋」とともに、天文九（一五四〇）年三月二十五日、公宴御月次御会への出詠歌であったことが知られる。晩春にふさわしい当季題であり、散り残った桜花が、若葉の生い茂る中、風にも日光にも冒されることなく、露を帯びて瑞々しく存しているさまを詠んだものである。残花を青葉とともに詠む趣向は、『金葉集（二度本）[2]』六七〇、

（題しらず）　盛経母

花のみや暮れぬる春のかたみとてあをばの下にちり残るらむ

などに代表されるごとく、特に珍しいものではないが、言継が第二句を「青葉の下」や「青葉の中」、「青葉の陰」などではなく、「青葉が底」としている点は、注意が払われるべきであろう。

本稿では、「青葉が（の）底[3]」という語句の検討を通じ、室町後期の廷臣たちが用いた和歌表現の特色を探っていきたい。

一　「青葉の底」の先行例

和歌における「青葉の底」の用例は、室町時代以前には、ほとんど見受けられない。『新編国歌大観』によれば、言継に先行する例は、尭恵の『下葉集』に一例、実隆の『雪玉集』に一例。いずれも、言継と時代の近い二例が挙げられるにとどまる。

『下葉集』五九五

此詩を和し侍りし

いとはじよ恨みはてたるよるの雨もあをばの底の花に残らば

この歌は、五九四、

暮春の比、建仁寺喝食得度のをりに潜曜和尚、葉底残紅といへる題にて

庭院情多欲暮春　残紅葉底久亘人　東風有意不吹●[4]　一行暗芳花落晨

に和したものである。

また、『雪玉集』三二七五には、次の一首がある。

（夏十五首）　残花何在

分暮す青葉の底にとぶてふのしろきをみても花かとぞ思ふ

『新編国歌大観』では、右のほかに江戸期の二例が挙がるのみであり、使用稀な詞であったかに見えるのであるが、『公宴続歌』[5]には次の通り、計六例が数えられることから、明応から永正期にかけて、急速に定着した表現であると考えられる。

「永正三年三月廿五日月次和歌御会」〇六七五〇

（暮春残花）　公条

そをたにも暮行春や残しけむ青葉のそこの花の一えた

「永正八年三月廿五日月次和歌御会」一〇八一三、一〇八六一

（残花薫風）　（元長）

それとなき青葉のそこをたつねても花の香さそふ松の山かせ

（残花薫風）　（隆康）

吹かせもさすかにおもへたくひなき青葉のそこの花の色かを

「永正十二年十一月十三日春日社法楽」一四九五三

（首夏）　公条

鳴とむる花やいつくと尋はや青葉のそこの鶯のこゑ

「永正十六年三月廿五日」一六四三九

（雨後花）　重親

にほふなり雨の名残の春風や青葉のそこの花にふくらん

「天文三年四月廿五日」二二四八五

（滝水）　（公頼）

滝の糸は空にみたれて夏山の青葉のそこにむせふ音かな

これら先行の八例は、いずれも晩春から首夏にかけての和歌であり、『公宴続歌』最後の一例を除き、すべて、緑に埋もれた中に残る桜花を詠んでいる。主題と表現が密接に結びついていた様子が知られる。特に、花がまとう湿気や、その香りに目が向けられることが多く、冒頭の言継歌もまた、この系譜に属するものである。

二　出典漢詩とその世界

このように、室町期和歌に類型的に現れる「青葉の底」表現は、『白楽天詩後集』巻二、格詩、「和微之詩二十三首」の十九、「和雨中花」[6]に典拠を求められる。

和雨中花

眞宰倒持生殺柄。閒物命長人短命。松枝上鶴著下龜。千年不死仍無病。人生不得似龜鶴。少去老來同旦暝。何異花開旦暝間。未落仍遭風雨横。草得經年菜連月。唯花不與多時節。一年三百六十日。花能幾日供攀折。桃李無言難自訴。黄鶯解語憑君説。鶯雖爲説不分別。粟底枝頭謾饒舌。

＊　＊　＊

眞宰倒に生殺の柄を持し、閒物は命長く人は短命。松枝の上の鶴著の下の龜、千年死せず仍ほ病無し。人生龜鶴に似るを得ず、少去り老來る旦暝に同じ。何ぞ異ならん花の旦暝の間に開き、未だ落ちずして仍りに風雨の横に遭ふに。草は年を經るを得て

菜は月を連ね、唯花にのみ多くの時節を與へず。一年三百六十日、花能く幾日か攀折に供する。桃李言ふこと無ければ自ら訴へ難し、黄鶯語を解すれば君に憑みて説かしむ。鶯は説くことを爲すと雖も分別ならず、葉底枝頭謾りに饒舌。

この詩では、咲いているうちに風雨にさらされ、短い命を終える桃花の嘆き（傍線部）を、鶯が、「葉底」や「枝頭」で代弁するという（破線部）。これに対し、和歌に詠まれる残花は、「青葉の底」で風雨をしのぎ、命を長らえているのであるから、白詩中の詞を採用することで、背後に同詩を想起させつつも、その発想をさらに転換させて用いたものであるといえる。

室町期和歌における「青葉の底」は、世の中のさまざまな障害から隔絶され、美しいものがあるがままの姿を保ちうる、一種の「理想郷」的世界として描かれているといえよう。

三　「〜の底」表現の位相

さて、和歌に「葉底」の語を取り込む試みは、これら「青葉の底」が初めてではない。先行する類似表現に、「木の葉の底」があるが、両者はどのような関係にあるのだろうか。

和歌における「〜の底」という表現に早くから着目され、精緻な考察を加えられたのは、佐藤恒雄氏であった。氏は[7]、

新古今時代の和歌が、その表現や発想の上で多くのものを漢詩からえているということは、周知のことがらに属する。

との前提のもと、続稿[8]において、『新古今集』四七四「露のそこなる」が本朝詩に見られる「露底」に相当することを指摘。新古今歌風形成期の歌壇に集中して見られる「〜の底」式表現の一群は、「漢土の詩（白詩）における「〇〇底」の型を応用した限りないヴァリアント」が本朝詩中に現れ、それを「和訳したかたちをとって成立した表現であ」るとされた。

そのうえで、「〜底」式表現を、由来と用法から、さらに分類しておられる。論中の語句を用いて要約すると、次のようである。なお、記号・番号は稿者が仮に付した。

A 漢土の詩に由来するもの。

1. 和語「そこ」の本義と同じく、深さあるもののいちばん下の意味で用いられたもの。

（例）「水のそこ」「心のそこ」ほか

2. 助字的用法。そのものの「した」「もと」「うら」「あたり」などの意味で、助字的に使用したもの。

（例）「花のそこ」「木葉のそこ」ほか

B 漢土の詩に見えないもの。

1. 譬喩的用法。和臭を帯び、日本的に馴化されたもの。

（例）「露のそこ」「霞のそこ」ほか

佐藤氏は、助字的用法の一例（右分類ではA-2）として、「葉底」を挙げられており、本朝詩の「葉底」が、前掲「和雨中花」詩の「葉底」と同様の使用法であって、「かなり明瞭な影響関係を認めてよい」

ものの一つであること、和歌に見える「木葉のそこ」表現も、ここから派生したものであることを示唆されている。

「木葉のそこ」は、同氏が掲げられた『正治二年院二度百首』の二首を含め、室町末期までに以下の五例が確認される。

『正治初度百首』七六三、

（冬）　（権大納言忠良）

露霜にまがきの萩は枯れはてて木葉のそこにのこる虫のね

『正治初度百首』一四六一[9]、

（冬）　（上総介藤原家隆）

此ほどはこまうちわたす山川も木のはのそこに声むせぶなり

『千五百番歌合』八百十二番（秋）、右、一六二三、

通具朝臣

あきかぜはこの葉のそこにふきかれて身にしみはつる夕まぐれかな

『新三井和歌集』三二五、

（同じ心を）[10]　平等院千福丸

埋もるる木葉の底の柴の庵はては時雨の音も聞えず

『雪玉集』三八一三、

いかにまちいかにとふべき人ならん木のはのそこの浅ぢふの宿

このほか、

『草根集』五二九二、

（落葉深）

おともせず散りし木の葉のそこびなき淵やはさわぐ霜のうは浪

なども同系列として認めうるであろうが、これら「木葉の底」の用例を見ると、晩秋から冬にかけての情景にのみ用いられており、「木葉」は、専ら落葉を指すものであった。散り積もった落葉による空間の閉塞性と、それにともなって生じた聴覚的な隔絶感を詠んだ和歌が多くなっている。

語の源泉を同じ詩に求めるとしても、「木葉の底」と「青葉の底」は、まったく異なるものとして捉えられ、使用されてきた。佐藤氏が本朝詩の「葉底」や、和歌での「木葉の底」と、白楽天「和雨中花」詩との関わりを示唆される一方で、

「〇〇底」なる類型表現が、平安朝中期以降の詩壇における顕著な流行表現であったことは疑いを容れない。むろん、助字的なこの措辞が、それほど強く意識されながら用いられたとは思われず、ごくありふれた、従って詩人たちの意識の表面に見えるか見えぬ程度の注意を払われながらの流行であったと見るべきであろう。

と断っておられるように、同氏が扱われた新古今歌風形成期においては、漢詩から語句レベルで影響を受けていながら、それすらも意識されないほど、「〜底」表現が頻用されていたようである。

それに対し、室町期に見られる「青葉の底」は、白楽天「和雨中花」詩の世界をより強く意識しており、和歌にすでに取り込まれていた「木葉の底」を介してではなく、出典詩から直接的に影響を受けた表現であることが知られるのである。

おわりに

本稿では、室町後期廷臣の「残花」詠に多く見られる「青葉の底」という表現が、白楽天の「和雨中花」に拠るものであること、その摂取のありようは、詩の世界観をも取り入れ、展開させたものであって、新古今集作者が（意識・無意識を問わず）漢詩の影響を受けて「木葉の底」の語句を作り、まったく異なる情景を詠むのに応用したのとは、根本的に異なるものであることを述べた。

「底」の用法として、助字的・譬喩的と認められるものが多くあるとしても、これ自体、上下の空間的広がりを感じさせる語であることは言うまでもない。最初に挙げた言継の「花緩残」歌などは、初句「春ふかく」と第二句を対照的に配し、意図的に「底」の語を選び、活かしたと考えられる。また、「青葉が底に」が、第三句へと直接つながらず、軽く切れることで、余情が生まれ、詠者が残花に寄せるいじらしい思いが、しみじみと伝わってくる。

平安・鎌倉期の主要な和歌作品については、その出典も、ほぼ解明され尽くしているかに思われるが、室町中期以降、新たに定着した表現については、探索いまだ充分とは言えない。同時代の和歌が、そうした検討を経ぬままに、「平明」「常套的」と過小な評価を蒙ってきたとすれば、憂うべきことである。先行する類似表現との関係性もふまえながら、考察を進めていかなくてはならない問題であると思われる。

〔注〕

（1）本文、歌番号は位藤邦生先生・相原「『拾翠愚草抄』――解題と翻刻――」（『表現技術研究』創刊号、平成16・10）によった。なお、同集は近年刊行予定の『私家集大成 CD-ROM』に再掲載予定であるが、前掲書とは歌番号が相違することをお断りしておく。

（2）和歌の引用は、特記せぬ限り、すべて『新編国歌大観』によった。

（3）「青葉が底」の格助詞「が」は、「の」と同義。以下、引用を除き、用例の多い「青葉の底」に統一して表記する。

（4）●は「尺」の下に「皿」・「尽」か。

（5）公宴続歌研究会編・井上宗雄氏監修・三村晃功氏代表『公宴続歌』本文編・索引編（和泉書院、平成12）和泉索引叢書46

（6）『白楽天全詩集』第三巻（日本図書センター、昭和53）、書き下しも同書によった。

（7）佐藤恒雄氏「新古今的表現成立の一様相――「むなしき枝に」「露もまだひぬ」をめぐって――」（『藤村文人先生頌寿記念論集 和歌と中世文学』（東京教育大学中世文学談話会、昭和52・3）

（8）佐藤恒雄氏「新古今的表現成立の一様相（続）――「露のそこなる」をめぐって――」（『中世文学研究』第4号、昭和53・7）

（9）同歌は『壬二集』四五八、『新続古今集』六三二にも入集している。

（10）二首前の三二三から、「山家落葉」題を受ける。

――あいはら・ひろみ、広島大学大学院博士課程後期在学――